The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『視霊者の夢』における方法の転換 : 概念の分析の放棄
Author(s)	中村, 修一
Citation	メタフュシカ. 2009, 40, p. 65-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8546
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『視霊者の夢』における方法の転換
──概念の分析の放棄──

中村修一

カントは『自然神学と道徳の原則の判明性』（1762 年執筆、1764 年公刊以下、『判明性』と略記）ではじめて公的に哲学（形而上学）の方法について正面から論じる。哲学においては、数学のように定義からはじめてはならず、与えられた概念の分析を通して定義を獲得することが第一の目標に置かれる。カントは数学の方法との対比の下、哲学の方法を概ねこのように規定する。

さて、こうした方法論は、『純粋理性批判』（第一版 1781 年、第二版 1787 年）の「超越論的方法論」の「純粋理性の訓練」（B736ff.）[1]の章においても継承されている。ただし、当然ながら、その方法が『純粋理性批判』を導く方法でないことは明らかである。後に詳しく見るように、概念の分析は同一律を軸に進められる。したがって概念の分析の成果は分析判断の形をとる（vgl. B10f.）。しかし、『純粋理性批判』の主要テーマは、同一律では捉えられない判断である総合判断の可能性を問う点にある（vgl. B10f., B19）。同一律を原理とする議論の枠に収まらない『純粋理性批判』の問題設定にとって、概念の分析という方法は無力である。「超越論的方法論」で概念の分析が哲学の方法として論じられてはいるものの、それはもはやカントの考える本来の哲学の方法ではない。カントがそこで概念の分析を哲学の方法として論じているのは、対比的に論じられている数学の方法の特性を浮き彫りにするための手段とみて差し支えない。

要するに、カントは『判明性』で示した哲学の方法の地位を『判明性』以後のどこかで格下げし、とるべき哲学の方法を別のものへと転換した。

本論の目的は、この方法の転換点が『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』（1766 年以下、『視霊者』と略記）であること、および、その転換が分析判断から総合判断への議論の力点の移行に密接に関連したものであることを見定める点にある。

---

[1] カントの著作からの引用はアカデミー版カント全集に基づき、巻数：ページ数を引用に続けて示す。ただし、『純粋理性批判』については第一版を A、第二版を B の記号で示し、そのページ数を付す。『覚書』については、R という略号とアカデミー版の通し番号を付す。引用文中の傍点の強調は、原文のゲシュペルトによる強調に対応し、**太字**の強調は原文のゴチックによる強調に対応する。なお、引用文中の［　］による挿入は引用者によるものである。

このことを示すために、本論は次のように考察を進める。まずは『判明性』で示される哲学の方法を確認し、その方法論を支えているのは同一律を原則とする内包主義的判断論であることをとりだす(1)。次に、カントが『負量の概念を哲学に導入する試み』(1763 年以下、『負量』と略記)で内包主義的判断論に収まらない論点の存在を自覚したことを見た上で(2)、その論点を契機としてカントが分析判断と総合判断の区別に思い至った点を確認する(3)。そして最後に、『視霊者』においてカントが概念の分析の方法を放棄[2]したことを、判断論における力点の移行との関連の下に明らかにする(4)。

1 『判明性』で示される哲学の方法は内包主義的判断論に支えられている

カントは『判明性』で、哲学の方法と数学の方法との相違を論じる。カントは数学の方法との対比を通じて、哲学の方法の提示を試みる。

両者の相違の基準を、カントは第一に、定義の扱いのうちに求める。

「数学はすべての定義に総合的に到達するが、哲学は分析的に到達する」(2:276)。

まず簡単に数学について見ておく。数学は「総合的」に定義を獲得するとされる。それは「諸概念の任意的結合を通して」(ibid.)定義を獲得する――例えば、「不等辺四角形」(ibid.)の概念の定義は、「四本の直線」、「一つの平面をなす」、「向かい合う辺が平行でない」(ibid.)という諸概念の結合によって獲得される――ということである。そして、定義が任意的結合によって獲得されるということは次のことを含意する。つまり「数学において私は定義がそれを与えるまでは、私の対象についての概念をまったくもたない」(2:283)、したがって「数学において定義は、私が定義された事物について持つことのできる最初の思考」(2:281)であり、よって、数学は「定義からはじめる」(2:283)学問であるということである。

これに対し哲学は「分析的に」定義を獲得する。哲学においては、「事象の概念はすでに与えられている」(2:276)。ただし、それは「混雑したもの」(ibid.)として与えられている。哲学においては、そうした経験的概念の分析を通してそれを構成している「メルクマール」(ibid.)(「分解不可能な概念」(2:279)、「要素概念」(2:280)、「単純概念」(ibid. vgl. 2:282))を判明化し、その概念の定義――「事象の周到に規定された概念すなわち定義」(2:284)――に到達することが目指される。要するに、「哲学の仕事は混雑なものとして与えられた概念を分析し、周到に規定されたものにすること」(2:278)であり、哲学において「定義はほとんど常に最後のものである」(2:283)。定義を到達点とする哲学の方法は、定義を出発点とする数学の方法から明確に区別される。哲学による「数学の模倣」(ibid.)は「有害」(ibid.)であり、厳に慎まねばならない。

ただし、カントは哲学の方法を概念の分析による定義の獲得としつつも、概念の分析が周到におこなわれることは事実的に困難であるとみる。そこでカントは定義ではなく、まずは「対象に

---

[2] 本論では哲学の方法としての概念の分析の「放棄」が論じられるが、それはカントの思考を導く中心的方法ではなくなるという意味である。『可感界と可想界の形式と原理』(1770 年)の「知性の論理的使用」(2: 393)、『純粋理性批判』の「超越論的方法論」に見られるように、中心的方法としてでなければ概念の分析は哲学の方法として語り続けられる。

ついて直接に確実な」（2:285）メルクマールを取り出すことで「対象についての真で完全に確実な判断」（ibid.）を求めるべきと考える。対象に関する定義は得られなくとも、カントはそうした確実な判断を「幾何学の公理のようにすべての推論の基礎におく」（ibid.）ことで、そこから確かな結論を引き出すことができると考えるからである（vgl. 2:286）。

よって、カントは原理的には経験的概念の分析による定義の獲得を哲学の方法に据えつつも、実際的に推奨するのは経験的概念の分析による確実な判断の獲得ということになる。

ところで、カントによれば、形而上学とは「私たちの認識の第一根拠に関する哲学」（2:283）である[3]。この点も踏まえてカントが「形而上学の真の方法」（2:286）とも規定する哲学の方法を改めて整理しておこう。哲学の方法の要点は、経験的概念の分析を通して、経験の根底にあって経験を規定している形而上学的な（超経験的な）第一根拠である概念、もしくは判断を取り出すことを第一の目標とするという点にある。

カントはこうして自身の提唱する哲学の方法を提示したあとに、「形而上学の確実性の本性」（2:290）へと考察を進める。以下では、その考察の過程で触れられる「形而上学の第一根本真理」（2:294）についての論述を頼りに、カントの哲学の方法を支える理論的背景を確認する。「形而上学の第一根本真理」は、「形式的原則」（2:295）と「実質的原則」（ibid.）として示される。「形式的原則」についての議論からみていこう。

カントは「すべての真なる判断は肯定か否定かである」（2:294）と述べた上で、判断が真であるための条件を示すことから形式的原則についての説明をはじめる。

> 「いかなる肯定の形式も、何かがあるもののメルクマールとして、即ち、あるもののメルクマールと同一であると表象される点にあるゆえに、それぞれの肯定判断が真であるのは、述語と主語が同一の場合である。そしていかなる否定の形式も、何かがあるものに対して矛盾すると表象される点にあるから、否定的判断が真であるのは、述語が主語と矛盾する場合である。それゆえ、すべての肯定の本質を表現し、したがってすべての肯定判断の最高の定式を含む命題は、すなわちいかなる主語にもそれと同一である述語が帰属するという命題になる。これが同一律である。そしてすべての否定の本質を表現する命題は、すなわち、いかなる主語にもそれと矛盾する述語は帰属しないという命題になり、これが矛盾律である。だから矛盾律はすべての否定判断の第一の定式なのである」（2:294）。

（ここでは肯定判断のみに着目する）肯定の形式は、述語である「何か」が主語である「あるもの」の「メルクマール」として表象される点にあるとされる。しがたって、肯定判断が真となるのは述語が主語のメルクマールに一致している場合、即ち「述語と主語が同一の場合」とされる。よってカントは、「肯定判断の最高の定式を含む命題」として主語と述語の一致をいう「同一律」をおく。これは、同一律を原則とし、判断の主語と述語を包含関係とみるもの、換言すれば、判断の述語を主語概念の内包としてみる判断論である。以下ではこうした判断論をさして、内包主義的判断論とよぶことにする。

---

[3] こうした形而上学の規定は、当時のドイツ学校哲学に共通のものであった。例えば、「形而上学は人間的認識の第一原理に関する学である」（A. G. Baumgarten, *Metaphysica*, § 1.）。

この判断の原則である「同一律」（と「矛盾律」）がカントのいう「形式的原則」である。「［同一律、矛盾律］両者は一緒になって、形式的な意味における人間理性全体の最高かつ普遍的な原則を形成する」（ibid.）。

このように「同一律」は「形式的原則」とされているが、その「形式的」の意味については注意を要する。批判期のカントに従うなら、それは対象に対する関係を度外視し、判断における単に論理的な関係にかかわる原則ということになろう（vgl. B 190, etc.）。しかし、ここではそうではない。「述語と主語が同一」である判断、即ち同一律に従う判断がただちに「真」なる判断とされていたことからもうかがえるように、同一律は、判断の論理形式の成立条件にとどまるものではない。判断における主語概念と述語概念の内容の一致の条件でもある。事実、カントは『判明性』執筆と同年の著作『三段論法の四つの格の誤った煩瑣性』（1762 年）において、判断する能力を「自分自身の表象を自分の考えの対象にする能力」（2:60）と規定している。カントにとって判断の可能性と、判断の対象の可能性とは不可分である。つまり、同一律はここで形式的な原則とはいわれてはいるものの、それは単に論理的な原則なのではなく、判断の内容をも律する原則としておかれている。

以上の点を踏まえるなら、哲学の方法の理論的背景が見えてくると思われる。経験的概念（主語概念）のメルクマール（内包）を取り出し判明化するという概念の分析の作業は、判断の形成作業にほかならない。そして概念の分析が形而上学的な第一根拠の獲得へと通じているのは、判断における概念間の連関とその対象である事象の連関の対応が保障されているために、概念の分析がそのまま事象の秩序のより先なるものへの遡行として認められるからである。つまり、概念の分析を事とする哲学の方法は、同一律を原則とする内包主義的判断論の基礎の上に成り立つものである点が確認される。

続いて、「形式的原則」と並んで「形而上学の第一根本真理」として挙げられる「実質的原則」をみる。

実質的原則は、哲学において定義に代えて求められた「対象についての真で完全に確実な判断」に相当するものであり、カントによれば、それは「証明不可能な命題」（2:295）である。証明不可能というのは以下の意味である。

> 「これら二つの最高原則のどちらかのもとに直接に考えられるけれども、それ以外の仕方では考えられない命題は、いかなる命題であれ証明できない。換言すれば、同一性、または矛盾が直接に概念の中に存しており、分析して両者を媒介するメルクマールによってそれらが見て取られることも、可能でもなく許されてもいない命題のことである。それ以外の命題は証明できる。」（2:294）

カントの挙げる例を用いて説明しよう。例えば「物体は分割可能である」という命題は証明可能であるが、「物体は合成されている」という命題は証明不可能であるとカントは述べる（2:294）。前者が証明可能なのは、「［大前提］物体は合成されている、［小前提］合成されているものは分割可能である、ゆえに、［結論］物体は分割可能である」（2:294f.）というように、「物体」と「分割可能」の両者を媒介する中概念として「合成性」というメルクマールが見て取られるからであ

る。それに対し後者が証明不可能とされるのは、「物体」と「合成性」を媒介する中概念が存在しないからである。合成性は、「物体の概念における直接的かつ第一のメルクマール」(2:295)ということである。そして、このようにして獲得される証明不可能な命題は「そこから確実な仕方で推論することができる所与をなす」(ibid.)ものとされる。

さて、ここで一つ確認すべきは、実質的原則は、形式的原則と並べられているとはいえ、前者は後者から独立した原則ではないということである。証明不可能な命題も、主語概念のメルクマールを述語概念として取り出すという点では他の命題とかわりはない。つまり証明不可能な命題も「形式的第一原則に従っている」(ibid.)。実質的原則も概念の分析によって獲得されるのだ。他の命題との違いは、取り出される述語概念が主語概念の「直接的かつ第一のメルクマール」である点に尽きる。実質的原則は、形式的原則に従属している。

カントは形式的原則をこえるなにかを実質的原則に割り当てているわけではない。結局、カントの方法の理論的背景は形式的原則の検討の際に述べたことに尽きる。

2 『負量』におけるカントは内包主義的判断論から外れる事態に気づきつつも、内包主義的判断論を放棄しなかった

カントは『負量』において、根拠の概念を「論理的根拠」(2:202)と「実在的根拠」(ibid.)に区別する。カントはこの区別のもつ意味を自覚する[4]ことで、内包主義的判断論に収まりきらない事態に直面する。

「論理的根拠」においては、「この根拠と帰結の関係は論理的に、つまり同一律にしたがって判明に洞察される」(ibid.)。これはつまり、「帰結が実際には根拠の部分概念と同一」(ibid.)であり、「帰結は概念を分析することで根拠に含まれていることが見出される」(ibid.)ということである。そして、帰結が根拠の部分概念(内包)とされる以上、この関係は、“合成されたもの(根拠)は分割可能(帰結)である”(vgl. ibid.)というように、根拠を主語概念、帰結を述語概念とした、内包主義的判断論に従う判断の形で表現される。

これに対し「実在的根拠」においては、根拠と帰結は「まったく別」(ibid.)であり、同一律に基づいては根拠と帰結の関係を理解することができない。例えば、スタゲイラ人という言葉(根拠)を耳にすると、ある哲学者のイメージ(帰結)が喚起されるが、この両者は互いに一致する部分を持っていない(vgl. ibid.)。しかしながら、この関係が「真なる概念」(ibid.)であることは疑いない。そこでカントは問う。「同一律によることなく、どのようにして何かが別の何かからでてくるのか」(ibid.)。カントはこの問いに対し、それが同一律、矛盾律によって生じるのではないということ以上の答えをもっていないと、自分の力不足を率直に認める(vgl. 2:203)。

同一律によって生じるのではないということは、同一律を原則とする概念の分析の方法が、この問いに対する解決能力を持たないということに等しい。

---

[4] 「論理的根拠」、「実在的根拠」の概念の区別自体は、『神の現存在の論証のための唯一可能な証明根拠』(1762年)ですでに言及されている(vgl. bes. 2:85ff.)。ただし、そこではまだ、カントはその区別のもつ重要性に気づいていなかった。

「実在的根拠の、実在的根拠によって定立されたり廃棄されたりするものに対する関係は……分解によって実在的根拠のより単純な概念へともたらされるような概念によってのみ表現される。しかし、結局この関係についての私たちの一切の認識は、実在的根拠の単純で分解不可能な概念で終わるのであって、実在的根拠と帰結の関係はぜんぜん判明にはされえない」(2:204)。

ここのポイントは、実在的根拠の概念を分析し、それの単純概念を取り出すことは可能であるが、それが実在的根拠と帰結の関係の解明にはつながらないという点である。この点については、より具体的にみておこう。ここでカントが「実在的根拠の単純で分解不可能な概念」ということで想定している概念は、同時期の形而上学講義の「実在的根拠」の概念について論じている箇所で、「単純概念」(28:24) としてあげられている「力」(ibid.) の概念と、『負量』で「力」の概念と同列に論じられている「原因」の概念と考えられる。こうした概念についてカントは次のように述べている。「私は原因と結果、力と行為という言葉によっては引き下がらない。なぜなら、私が何かを何か別のものの原因とみなすなら、あるいは原因に力の概念を付与するなら、私はその原因のうちにすでに実在的根拠とその帰結という関係を考えているからである」(2:203)。つまり、実在的根拠の概念の分析の結果、「力」、「原因」といった概念を取り出したところで、それは単に実在的根拠と帰結の関係が「原因と結果」の関係に置き換えられたということ以上の意味を持たない。結局、当の関係の解明は手付かずのままに終わる。

この問題に対し、概念の分析は無力である。これはカントの哲学の方法の危機である。カントは何らかの対処を求められる。カントの打った手は、実在的根拠と帰結の関係は「判断によっては表現されえない」(2:204) とし、実在的根拠と帰結との関係を判断ではないとすることであった。さきにみたようにカントは同一律を原則とする内包主義的判断論をとる。したがってカントはその枠に収まりきらない実在的根拠と帰結の関係を「判断」から締め出すことで、内包主義的判断論を基盤とする哲学の方法の温存を図る。カントは『負量』出版の 2 年後の『1765-1766 年冬学期講義計画公告』(1765) においても『判明性』の参照を求め、『判明性』で示された哲学の方法を――実在的根拠にかかわる論点に触れることなく――再度論じている (vgl. 2:308f.)。

本節の最後に次の点を確認しておきたい。それは、カントは「**何かがあるがゆえに別の何かがある**」(2:202) という実在的根拠と帰結の関係、つまりは因果関係を解明しえないとしながら、原因が正当な形而上学的概念であることを疑っていないということである。

「実在的根拠の連結を私たちは論理的にではなく、単に経験を通してのみ洞察することができる」(28:24)。つまり、因果関係に関して私たちは、ただ個別的な経験的実例からその関係が実際に存在することを確認することができるに過ぎない。『負量』においてカントは自然の現象、心理的現象、道徳的現象にみられる実在的根拠と帰結の関係の実例を列挙する (vgl. 2:179ff.)。カントはそこから、『判明性』で示された哲学の方法に従い、分析的に議論を進める。カントは「わかりやすい実例から普遍的命題へと登り行くとき、不安になる原因を持つ」(2:189) とし、安易な普遍化 (即ち分析) に慎重な姿勢を見せつつも、それらの現象において因果関係が成立していることの確認から、因果関係を分析的に取り出し、因果関係が一切の現象の根底に位置する普遍

的原理であると議論を進める（vgl. 2:194）。要するにカントは原因を「私たちの認識の第一根拠」として、つまり形而上学的概念として認めるのである。形而上学的概念として認められるものである以上、原因の概念の適用対象に制限はない。形而上学的概念の射程は対象一般に及ぶからである。それゆえカントは、「神の意志は世界の存在の実在的根拠を含んでいる」（2:202）というように、経験を通しては決して洞察することができないような対象も原因の概念の守備範囲として扱っている。

カントがこうした姿勢をとるのも、内包主義的判断論から外れる事態を自覚しつつも、基本的には内包主義的判断論を受け入れている以上、当然のことである。というのも、先に見たように、内包主義的判断論に従うならば、概念の関係はそのまま事象の秩序を映し出す。したがって、分析的に議論を進めていくことは同時に事象の秩序のより先なるものへの遡行であり、経験の根底にあって経験を支える形而上学的根拠を探りだせるということになるからである。

後のカントの言葉を用いるなら、カントはいまだ、経験によって得られた情報からの安易な普遍化をよしとする「感覚の夢想家」（2:342）であった。

3　カントは『負量』で得た論点の考察を進め、判断を分析判断と総合判断に区別する

以上から確認できるように、カントは、『負量』においても、そしてそのあと『1765-1766 年冬学期講義計画公告』に至ってもなお、公的には『判明性』で示された方法論堅持の姿勢を見せる。しかし、その裏では、『負量』で得た実在的根拠に関する論点についての考察を進めていた。そのあたりの事情を『覚書』[5]参照しながらみていくことにしよう。

論理的根拠と帰結の関係のような内包主義的判断論に則る判断は、同一律を原則とするのであった。カントは「同一律」（および「矛盾律」）を「形式的原理」（R3741）とし、「形式的原理は、分析判断、つまりは理性的判断の第一根拠にすぎない」（R3746）と論じる。同一律に従う判断に「分析判断」もしくは「理性的判断」の名が与えられる。分析判断の「分析（的）」とは、主語概念の内包を分析的に取り出すという点を、理性的判断の「理性的」とは、同一律によって主語と述語の関係が洞察されうるという点を表している。ともあれ、「あらゆる分析判断は理性的判断であり、その逆も成り立つ」（R3738, vgl. R3744）。

それに対し、実在的根拠と帰結の関係は、同一律からは解明されえない関係であった。カントは、同一律からは解明されえない、つまりは「理性的には洞察されえない」（R3755）当の関係を、「理性的判断」とされる同一律に基づく判断からはっきりと区別している。この関係は、先に見たように、同一律ではなく、経験を通してのみ洞察されるものであった。カントはこうした分析判断と対照される関係をあらわす判断をさして「総合判断」と呼ぶ。「あらゆる経験的判断は総合判断であり、その逆も成り立つ」（R3738, vgl. R3744）。

カントはこのようにして、『負量』で示された二つの関係を二つの異なる「判断」として定式化する。『負量』では、内包主義的判断論だけが唯一の判断論であったため判断として認められ

[5] ここで参照する『覚書』は、アディッケスによって 1764 年（『負量』出版の翌年）から 1766 年にかけて書かれたと推定されるものである。

なかった同一律に基づかない関係も、ここでは「総合判断」として規定される。

ところで、内包主義的判断論に従う限り、判断における概念の関係は、事象の関係に直結する。その一方で、『負量』でいわれた因果関係も、経験から取り出されたものであり、それは事象との対応関係を持つ。同一律に基づく秩序とそれに基づかない秩序、『負量』においてカントは二つの異なる事象の秩序をもっていたことになる。ただし、『負量』の段階のカントは、同一律に基づく秩序を優先したのであった。

しかし、『負量』後のカントの考察は別の方向を示している。

まずは次をみよう。

「人間の認識のあらゆる原理は形式的か実質的である。前者は単に判断における概念の関係だけを含む。つまり論理的原理か形而上学的原理である。後者は事物の関係を含み、それは総合的である」(R3747)。

ここでは、認識の原理が「形式的」か「実質的」かに分けられ、前者が「判断における概念の関係」、後者が「事物の関係」にかかわるとされる。「概念」と「事物」の区別がポイントとなっている。ここでいう形式的原理とは、先に見たように同一律（矛盾律）である。『負量』にいたるまでは内容をも律する原則であった同一律が、ここでは事象と切り離されて捉えられる。そしてそうした同一律が「形而上学的原理」として理解されうるものである以上、形而上学は事象との連関を失うことになろう。それに対し、事物の関係にかかわる実質的原理が、「総合的」原理とされる。この原理が具体的に何をさすかはさておき、総合的原理として同一律ではない何かが想定されていることは明らかである。

こうした区別は、原理についての論述からだけではなく、分析判断と総合判断の構造的区別に即した論述からもみてとることができる。

「あらゆる分析判断は、概念において（in）、しかし、混雑して考えられているものが何であるかを教える。総合判断は、概念と（mit）結合的に考えられることになる何かを教える。あらゆる判断において、主語の概念は、私が客観 x について考えるあるもの a であり、述語は、分析判断においては a のメルクマールとしてみなされ、総合判断においては x のメルクマールとしてみなされる」(R3738)。

分析判断が混雑した主語概念の分解であること、総合判断が主語概念と、それとは別の何かである述語概念を結びつける判断であること、この点を踏まえれば、引用の中の一つ目、二つ目の文は容易に理解できるだろう。注目すべきは最後の三つ目の文である。分析判断において述語は「客観 x について考えるあるもの a」、つまり、主語概念のメルクマールといわれ、総合判断における述語は、主語概念に対応する「客観 x 」のメルクマールといわれる。分析判断では事物と区別された概念間の関係が問題にされ、総合判断では事物の関係が問題とされる[6]。

つまりカントは、同一律並びにそれに基づく判断と事象との間に認めてきた対応関係を断ち切る。そして事象との連関を有する判断として、分析判断にかえて総合判断をおく。これは、同一

---

[6] Vgl. D. Koriako, *Kants Philosophie der Mathematik* (*Kant - Forschungen* ; Bd. 11), Hamburg, 1999, S. 195.

律を原則とする内包主義的判断論を基盤としてきた形而上学が、もはや中身のない概念間の関係の探求に陥るということを意味する。

カントは、表向きは『判明性』以来の方法論堅持の姿勢をとりつつも、その裏ではそれを乗り越える考察を進めていた。続いては『視霊者』に目を移し、そこで展開される哲学の方法を検討する。『負量』以前と同様に、『視霊者』でも分析判断、総合判断の術語自体は登場しない[7]。しかし、『視霊者』ではこれら両判断のもとに含意される事態が表に出てくる。そしてそれは、『視霊者』にみられる方法論に密接に連関することになる[8]。

4 『視霊者』においてカントは概念の分析という哲学の方法を放棄する

『視霊者』のカントは「物質的世界」(2:329) と「非物質的世界」(ibid.)(「可想界」(ibid.))、「見える世界」(2:337) と「見えない世界」(ibid.)、つまりは経験的世界と超経験的世界の二世界説を採る。両世界は、互いにまったく区別された非連続な二つの世界である。両者は異種的である (vgl. 2:338)。

カントによれば、「認識」(2:322) されうるのは経験的概念だけであり、超経験的概念を「把握」(ibid.) することも「洞察」(ibid.) することもできない。「経験的概念から逸脱し、いかなる経験によっても、さらにまた類推によっても理解されえないものについてはいかなる概念も作りえない」(ibid.)。超経験的世界についてとりうる態度はただ無知のほかにはないとカントは考える (vgl. 2:319)。超経験的世界について理解しているかのごとく語る者は、いずれも、不可能なことを可能としている「夢想家」(2:342, etc.) である。彼らが論じる概念は、超経験的な概念を認識しうると考えるところに成立する「窃取された概念」(2:320Anm.) にほかならない。『視霊者』のカントは「経験と常識の低地」(2:368) に立ち、また、そこだけを確かなものとして認める徹底した経験論者である。

二世界説、そしてカントの徹底した経験論的態度を踏まえて、哲学の方法についての次の論述をみてみよう。

> 「というのは、これは誰もが知っているに違いないが、すべての認識には、一方にアプリオリな、他方にアポステリオリな二つの端があり、その端で人は認識をつかむことができるからである。なるほど現代のさまざまな自然学者たちは、私たちはアポステリオリな端から出発しなければならないと宣言しているし、彼らの考えによれば、私たちはまず十分な経験的知識を確保してから、次に普遍的でより高次の概念に順々に上昇することによって、学とい

---

7 分析判断、総合判断という術語は、公的には『純粋理性批判』ではじめて用いられる。

8 分析判断、総合判断の区別の成立については、早いところでは『判明性』直後にみるもの (vgl. D. Henrich, Kants Denken 1762/63 Über den Ursprung der Unterscheidung analytischer und synthetischer Urteile, in: *Studien zu Kants philosophischer Entwicklung*, Hildesheim, 1967, S. 35.) から、遅いところでは 1775 年頃のデュイスブルク草稿の段階にみるもの (cf. L. W. Beck, *Early German Philosophy*, 1969, p.466.) まで、様々な解釈が提起されている。本論は、『負量』以前のカントはまだ内包主義的判断論に対する疑念を抱いていないこと、そして次節でみるように『視霊者』の立論は分析判断、総合判断の区別のもとに含意される事態と不可分な関係にあることから、本節で参照した『覚書』についてのアディッケスの年代決定を信頼し、分析判断と総合判断の区別の成立を『負量』後から『視霊者』以前の間の時期とみるものである。

ううなぎの尻尾をつかむことができるという。しかし、たとえこのやり方が比較的うまく行われたとしても、それは到底学問的にも哲学的にも十分なものではない。なぜなら、このやり方でいくと、もう決してそれには答えられないところの、なぜという問いの前に立たされるからである。これはちょうど、手形を今決済すべき商人が、また次の機会にして欲しいとにこやかに頼むことと同様に、哲学者の面目にかかわることである。それゆえ慧眼な人々は、この不都合を避けるために、対立するもう一方の限界から、すなわち形而上学の最高地点から出発した。しかしこちらにも新たな難点がある。というのは、私は知らないがどこかではじめそして私は知らないがどこかにいく、そして根拠を積み重ねても経験に合致しそうにないという難点があるからである。」(2:358)。

カントは哲学者がとりうる方法として、経験から根拠へという「アポステリオリな」方法と根拠から経験へという「アプリオリな」方法の二つをあげ、その両方を批判している。

内包主義的判断論に基づく概念の分析の方法においては、経験的概念の分析を進めていけば、経験の根底にあり、認識の第一根拠である形而上学的概念もしくは判断にいたりうると考えられていた。そしてこうした方法が可能なのは、判断における概念間の連関はそのまま事象の秩序の連関に対応し、その秩序は経験的なレベルから超経験的なレベルへと連続的につながっていると想定されていたからであった。つまり、ここでの概念の分析とは虫眼鏡のようなものである[9]。虫眼鏡を使えば、その対象ははっきりとみえるようになるが、虫眼鏡を当てる前と後とで、別のものを見ているわけではない。経験的概念とその分析の結果得られる形而上学的概念の違いも、同じものの見え方の違いに過ぎない。内包主義的判断論においては、世界は一つである。それゆえまた、『判明性』においてカントは、概念の分析の結果得られた形而上学的概念もしくは判断を推論の基礎とする限りではあるが、そこからの演繹即ち総合を許容することができた。要するに、『視霊者』以前のカントは、アポステリオリな方法とアプリオリな方法の有効性を認めていた。

しかし、いまやカントは二世界説を採る。経験の領域と超経験的である形而上学の領域は非連続におかれる。そのため経験的概念に虫眼鏡をあててみても、経験的概念は経験的概念のままであり、形而上学的概念が見出されることは決してない。また、直ちに形而上学的概念を立て、そこから演繹を開始しても、経験的概念への通路はない。

以上を踏まえ、二つの方法をそれぞれより具体的に検討してみよう。まずアプリオリな方法についてみると、これはつまり、「形而上学の最高地点」として定義をまず据え、そこからの演繹によって経験に通じる知見を導き出すという方法である。こうした方法は、カントがすでに『判明性』で数学の方法の模倣として批判の対象としていたところであり、ここでの批判もその変奏ということができる。ただし、二世界説に立つカントにとっては、定義からはじめる方法への批判はより原理的なものとなる。というのも、いまや二つの世界の断絶により、定義から経験に通じる道は完全に閉ざされているからである。カントはこうしたアプリオリな方法をとる者として特に「ヴォルフ」(2:342)、「クルージウス」(ibid.)の名を挙げ、彼らを「空中楼閣師」(ibid.)、

[9] 「知性にとっての概念の分析は、視覚にとっての虫眼鏡にほかならない」(M. Mendelssohn, Abhandlung über die Evidenz, in : *Gesammelte Schriften*, Jubiläumsausgabe, Bd. 2, S.274.)

あるいは「理性の夢想家」（ibid.）として厳しく批判している。

アポステリオリな方法は、まさにカントの提唱していた方法である。カントはこの方法を直接には「自然学者」の方法になぞらえているが、『判明性』でカントは自身の方法を、「ニュートンが自然科学に導入した方法」（2:286）と「根本的に同じ」（ibid.）としていた。したがって、アポステリオリな方法の批判はカントの自己批判でもある。

カントは経験的概念の分析を通して形而上学的概念を獲得できると考えていた。しかし、もはやその道は閉ざされている。つまり、「経験的知識」から「普遍的でより高次の概念」に「上昇」していっても、形而上学的概念に行き着くことはできない。認識の第一根拠についての「なぜ」は、どこまでも解明されずに終わる。もし概念の分析によって形而上学的概念を取り出しえたとするなら、それは「窃取された概念」である。そうした主張をする者は、カントによれば「感覚の夢想家」（2:342）にほかならない。

そのため、『負量』では形而上学的概念とされた原因の概念も、『視霊者』ではその扱いも変わってくる。因果関係に関してカントは次のように言う。

> 「哲学の役割は元来、原因と結果、実体と働きという諸関係の中で錯綜した諸現象を解きほぐし、それらをより単純な表象にもたらすことにあるからである。しかし、最後にそうした根本関係に到達したら、哲学の仕事はそこで終わる。そしていかにしてあるものが原因でありうるか、あるいは力を持つことができるかということは、理性によっては決して洞察することはできず、こうした諸関係は経験からのみ取り出されなければならない。なぜなら、私たちの理性の規則は、同一性と矛盾に関する比較にのみかかわるからである。」（2:370）

ここを読む限り、カントは『負量』の段階とおなじ立場に立っているように見える。というのも、『負量』の段階と同様にここでも、因果関係は同一律に基づいては解明されず、経験を通してその関係に即した事例を確認することができるに過ぎないと語られているからである。

ただし、『負量』のカントは、概念の分析の結果得られる原因の概念が形而上学概念として認められることについては疑っていなかった。それゆえカントは、原因の概念を神という超経験的な対象に躊躇なく適用できたのであった。

それに対し『視霊者』のカントは、個別的経験に即して因果関係の存在を認識できるということ以上は何も言えないとする。概念の分析によって因果関係という「根本関係」を取り出したとしても、それを直ちに認識の第一根拠である形而上学的概念とすることはできない。先に見たように、そうしたことをするならそれは「窃取された概念」となる。カントにとって原因の概念はもはや形而上学的概念ではない。「原因の概念は総合的であり、それゆえ経験的である」（R3749）。

そのため、当然原因の概念を『負量』のように超経験的対象に適用することは認められない。例えば、魂という超経験的対象に関して原因の概念の適用を試みるならば、その概念は空想的な丁稚上げである（vgl. 2:371）。また、経験の根底に原因の概念といった形而上学的概念をもはや想定し得ない以上、経験の可能性は経験によってのみ決定されることになる（vgl. ibid.）。経験の真偽の基準は「大多数の人々の間に一致する感覚の法則」（2:371f.）におかれる。『視霊者』のカントは真理認識に関していわば多数決原理をとっている。

以上から明らかなように、『視霊者』において概念の分析は、事象の秩序のより原理的なものへの遡行としてはもはやみなされない。概念の分析の果てに形而上学的概念を獲得できると考えるのは夢想とされる。これは、「同一律」、そして同一律を原則とする「分析判断」が事象との連関を失い、概念間の関係のみを表す判断とされたことからの必然的帰結である。そしてさらに、同一律が「形而上学的原理」であることを考えれば、形而上学が空虚な思弁として批判の対象とされるのも無理のないことであった。カントは内包主義的判断論に基づく概念の分析という哲学の方法を、形而上学ともども放棄した。

カントにとって事象との連関が認められる判断は「総合判断」だけである。したがって、二つの事象の秩序を含んでいた『負量』と異なり、『視霊者』のカントの持つ事象の秩序は一つである。カントにとっての経験とは、なによりもまず、因果関係にみられるような総合判断である。「経験と常識の低地」とは総合判断からなる経験的世界にほかならない。ところで、総合判断は同一律によっては解明されえない判断である。そしてこの時点のカントが形而上学的原理として承認するのは同一律のほかにない。そのため、カントは総合判断の経験的事実性を直視するだけで、総合判断に即した形而上学の建設の可能性を思い描けずにいる。『視霊者』のカントは徹底した経験論者であるほかなかった。

したがって『視霊者』では積極的な哲学の方法は示されてはいない。しかし、概念の分析という哲学の方法の放棄、および、そうした議論の背景としての分析判断から総合判断へのカントの力点の移行、『視霊者』はこうした方法論上の重要な論点を示している。

改めて確認しておくが、『視霊者』に分析判断、総合判断の術語は登場しない。しかし、判断論を巡るカントの思考の進展と『視霊者』で示される方法論を切り離して考えることができないことは、以上の議論から確認されるとおりである。

おわりに

『判明性』で哲学の方法として提示された概念の分析が、『視霊者』において放棄されるまでの過程をスケッチした。そして、その過程は、分析判断を中心にする立場（内包主義的判断論）から総合判断を重視する立場への転換の過程に対応していることをみた。

さて、『視霊者』のカントは、「形而上学の蝶の羽」（2:386）をおさめ、「経験と常識の低地」にとどまり、そこを安住の地とすべきと訴える徹底した経験論者である。

しかしこれは、カントが形而上学を無用とみなしていたということを意味するわけではない。自らを「形而上学にほれ込む運命」（2:367）にあるとも述べるカントは、形而上学の追求の必要性を疑わない。「私は客観的に考えて、形而上学そのものを取るに足りないものともなくてもよいものとも思わない。それどころか私はとりわけ最近になって形而上学の本性とそれが人間認識中に占める独自の位置を洞察するようになってからは、人類の真の永続的な幸福さえ形而上学にかかっていると確信している」（10:70）[10]。

---

[10] Kants Brief an Moses Mendelssohn. 8. April 1766. (10:69ff.)

カントは、形而上学の建設には、「独断の衣装を引き剥がし、洞察と称されているものを懐疑的に取り扱う」（ibid.）ことで、まず「おろかさを除きさる」（10:71）こと、つまり思弁の奔放を排除することが先決と考えた。『視霊者』は、形而上学建設のために必要な、そうした「浄化剤」（ibid.）として位置づけられている。

したがって、カントは『視霊者』で内包主義的判断論という独断の衣装を脱ぎ捨て、経験と常識の低地という名の総合判断からなる経験的世界に立つべしと主張するが、その場所をカントの思想の終着点ととることはできない。形而上学者カントにとって、その場所は、まやかしではない真の形而上学を建設するための確かな立脚点となる。

『視霊者』以降のカントは、総合判断を巡って議論を深めていく。そしてその姿勢は終生かわることはない。カントは『視霊者』を機に、経験的概念の第一根拠を問うこと（概念の分析）から、総合判断としての経験の第一根拠を問うことへと哲学の方法を転換することになる。『純粋理性批判』に結晶するカント独自の“経験の形而上学”の決定的な端緒はここにある。

（なかむらしゅういち　哲学哲学史・博士後期課程単位修得退学）

Der Wechsel der Methode in den *Träumen eines Geistersehers*
——Der Verzicht auf die Analyse der Begriffe——

Shuichi NAKAMURA

In einer Abhandlung der sogenannten vorkritischen Periode, *Untersuchung über die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral* (1764), betrachtet Kant die Methode der Philosophie zum ersten Mal. Dabei behauptet er, dass der Hauptpunkt der Methode der Philosophie in der Analyse der Begriffe liegt.

Aber in der *Kritik der reinen Vernunft* (1781, 1788) bestimmt Kant den Hauptpunkt der Methode der Philosophie anders. Er verzichtet auf die in der Untersuchung genannte Analyse der Begriffe. Somit ändert er seine Ansicht über die Methode der Philosophie irgendwann nach der *Untersuchung*.

In diesem Aufsatz versuche ich darzulegen, dass sich dieser Wechsel in den *Träumen eines Geistersehers, erläutert durch Träume der Metaphysik* (1766) vollzieht.

「キーワード」
カント、概念の分析、方法、『視霊者の夢』